

第2回IF学生成果発表会

2010. 9. 7

加齢研実験研究棟セミナー室1

Cellular biology in the context of network medicine グループ

開会の挨拶

出澤 真理 教授 (細胞組織学分野)



本日の「Interdisciplinary Force (IF) 学生成果発表会」では、皆さんがこれまで進めて来た研究をわかりやすく発表し、その後も活発な討議をして、今後の研究の進展に役立てていってほしいと思います。

Network Medicine は、いくつかの階層に分かれています。本日は、「Cellular biology in the context of network medicine」ということで、1番ミクロ的な細胞の中同志という概念の中での Network Medicine ということになります。タイトルを見ると、実際にはいろいろな研究領域のようですが、重要なことは面白いかどうかということです。皆さんの研究は面白い内容のものと思いますので、是非活発な議論をお願いします。

発表

丹治 泰裕 (分子代謝病態学分野)

「A DPP-4 Inhibitor, Vildagliptin, Exerts a Protective Role under ER Stress in β Cells」

学生成果発表会は、他の専門分野の方々と交流できるため、視野を広げる非常に良い機会であると思われます。

私は、様々な研究分野の方々が聴衆であるため、自分の発表をできるだけ理解してもらうよう努めました。とても困難であるのを実感しました。今後の課題にしたいと思います。



黒田 康勝 (細胞組織学分野)

「成人ヒト間葉系細胞に内在する多分化能細胞の探索」

今回のような成果発表の場を与えていただいたことで、自分の研究結果をまとめ、発表するよい機会とすることができました。他の先生方がどのような視点で自分の研究を見るのかということがわかり、大変勉強になりました。これは、今後自分が発表を行っていく上で織り込んでいくべき重要なことであると気づかされました。また、普段はあまり聞くことのできない、他の研究室の先生方の発表を聞いたのも大変貴重な経験でありました。この度は IF 成果発表会という発表の場を設けて頂き、本当にありがとうございました。最後になりますが、開催にご尽力いただいた NM-GCOE の先生方、拠点支援室の皆様にお礼申し上げます。



船木 智（加齢研・免疫遺伝子制御研究学分野）

「SMAP2 ,One of ArfGAP, is Localized at the Trans-Golgi-network」

第2回IF学生成果発表会で違う分野の方々の研究内容を聞くことができました。また自分の研究内容についても、発表する機会をいただき、他の研究室の先生方のご意見をいただくことができました。今までに無いご意見やご指摘で勉強になりました。他の研究室の方々の研究内容もどれも面白く、興味深い研究内容でした。自分の研究に今回ご指摘をいただいたことをしっかりと反映させ、より面白い研究を進めていきたいと思っております。



辻 拓史（生命科学研究科・情報伝達分子解析分野）

「p114-RhoGEF and Lfc Mediate Wnt-3a/Dvl-induced RhoA Activation and Neurite Retraction in Mouse Neuroblastoma Cells」

今回成果発表会に参加させて頂く事で、他研究科の方々の研究へのアプローチ方法、考察方法など、多くの刺激を受ける事が出来ました。また、普段はあまり経験することの少ない、英語でのプレゼンテーションを行なう機会を与えて頂き、研究のディスカッションという側面だけではなく、「如何にして他分野の方々に自らの研究の面白さを伝えるか」ということの難しさ、面白さを経験する事が出来たという意味でも貴重な体験をさせて頂く事が出来ました。

今回の成果発表会で得た経験は、今後の研究生活においても多くの面で自身を支えてくれるのではないかと感じています。



池田 真教（生命科学研究科・情報伝達分子解析分野）

「Critical Roles of Furry in Microtubule Dynamics during Mitosis」

今回はこのような機会を与えていただいたことで、異なる分野の方々に対し、どのように研究内容の面白みを伝えたらよいのかを身をもって感じる機会となりました。また、普段、接することのない他の分野の大学院生の発表を聞くことは新鮮であり、参考になる点も多く、大変有意義な発表会でした。お忙しい中、お集りいただきましたNM-GCOEの先生方、拠点支援室の皆様に深く御礼申し上げます。



伊藤 克彰（薬学研究科・薬物送達学分野）

「Quantative Expression Profile of Membrane Proteins in Cynomolgus Monkey Blood Brain Barrier and its Developmental Changes」

サル血液脳関門におけるトランスポーター発現量の定量プロファイルに関して発表させて頂きました。自身のプレゼンテーションでは、専門が異なる方々に研究をいかに面白いと思って頂くかを意識してスライド構成を考え、英語での発表に行い、普段の学会発表ではなかなか鍛えることができないプレゼンテーションスキルを磨くことができました。また、専門が異なる先生方からの質問とアドバイスを頂くことで、普段とは異なる角度から自身の研究内容を確認することができ、新たな課題の発見につながったので大変参考になりました。さらに、他の方々のプレゼンテーションも興味深い発表ばかりで刺激を受け、自身もさらに研究に励んでいきたいと思っておりました。



開会の挨拶

水野 健作 教授（生命科学研究所・情報伝達分子解析分野）

演者の方御苦労さまでした。特に今日は、医学系研究科・加齢研・生命科学・薬学それぞれの部局からの発表でしたので、まさに Interdisciplinary な会になったと思います。Interdisciplinary と言っても、実際はなかなか難しいのですが、このような発表会をすることで違う部局の先生からお話を伺ったりすることによって、広い視野で捉えることができると思います。皆それぞれ自分の研究を面白いと思ってやっていることと思いますが、その面白さを広い分野の先生に伝えないとならない、そういう発表を心がけるといことが、この発表会の意義にもなると思います。今回2人が英語で発表しましたが、このような小さい会で練習したというのは大変良かったと思います。今回コメントいただいたことを参考にして、頑張っていってほしいと思います。



オブザーバーの先生からの総括

佐竹 正延 教授（加齢医学研究所・免疫遺伝子制御研究分野）



自分にとって異なる分野の研究発表を聞くのは、それが学生さんの発表であったとしても、随分と勉強になるものだと感じました。なかで NEGATIVE な意味もないわけではありません。データは豊富なのに、おそらく PRESENTATION の仕方にあるためか、何が素晴らしいのか、聞いていても得心できなかつたりします。しかしながら、そういう事はいずれ克服できるものと期待しましょう。何といっても POSITIVE な意義、即ち未知の領域に触れられることの新鮮さ、驚き、に優るものではありません。学生さんも教授も、同じです。老いさらばえて、病み、止むまでは、我を、今を忘れて、知的好奇心に没頭いたしましょう。

